

歌集『あかね雲』より (二)

登美子

露含む茶の木の花は小さくも

眞白く八重に奢りて咲きぬ

息吹峰に猪と戦い傷つきて

亀山に逝かれし尊若きと言う

小さいかけら集めて複せし瓶埴輪

古代語あやつり尊を偲ぶや

友逝きて二度と来ぬ気のこの家に

深々とお辞儀し後見ず帰る

漢方葉香る湯にいて

平安に過ぎし一日をひとり惜しみぬ

朝顔の明日咲く渦のゆるみいて

淡紅のほのかに見ゆる

歌詠むは自己満足よと言う友に

反発もせず笑みのみ返す

小石にもつまづきかける我支え

孫は車道側を歩いてくれる

朝露に濡れし川辺にふんばりて

蚊遣に火つけて草刈進む

芋の葉の大きくなりし露の玉付きて

秋の深さを知りぬ

奥伊吹探訪すれば吊身草

野仏の前に群れ咲きており

皆老いて巣立ちし場所に戻りくる

さまざまな人世顔に写して

電車過ぐる音も安しと思いおり

住みなれし線路際の家

川端を歩みて浮かびし言葉一つ

手帳に控えて帰り急ぎぬ

だんぐと耳遠くなり

法話聞く席前にして御仏拝む

高々とクレーン機天に操れる

お下げの乙女眼差し厳し

葉は散りて若葉育てる土となる

われも後世のために生きたし

大宇宙われの耕やせし跡ありや

蚕のきつかき傷にも足らずや

何思い死人の夢をみたのやら

胸に付く手の重く汗ばむ

古希にして始めし押し花数増えて

群れなすコスモス額にと摘まみぬ

チンチンと電車に並びて行くバスに乗りて

お多賀の宮に詣でる

大石の屋敷の前の小さな店

赤穂に取れし塩を買いおり

討ち入りの法被着こみて

並びいる友の最中で太鼓持たさる

枯れ菊を焚火にて芋焼く匂いして

隣の畑より寄りて来る友

墓道に木屑の匂漂いて

ほのかに見ゆる朱の色の小花

齢重ね雪降る冬も良しと思ひ

歌詠み居眠りテレビと遊ぶ

陽当りの廊下に眺める梅の花

今や咲き初み香りてくるや